



天野屋直之傳

天野屋直之傳  
天野屋直之傳



特別  
又 6  
5816



天川家義平

從來生著巷閭邊。志在忠貞是屬天。  
此義民誰得比。砂中金盪泥中蓮。



天野屋利兵衛傳

天野屋利兵衛名直之大坂人為鄉長世往還於  
赤穗城主淺野君之門特見眷顧赤城元祿之變  
諸士會議直之即走於赤城聞其處分欲為效萬  
一之力久之義士相結復讐之議定殊秘而不出  
內外莫有知之者獨直之以其忠誠得與聞焉大  
石良雄又竊與直之議凡所用兵仗器械一切屬  
託直之製造之既而義徒各自潛匿于三都之間  
直之在大坂一謀成之乃妻子僕從亦不令知之



躬自奔走於工肆隨成而輸之于江戶矣冶工神  
力氏者詣官曰有請造一長兵者以其在職而諾  
而未爲之但其制甚奇異是以敢告求其人則直  
之也乃逮而至按驗之直之曰是市井備儉兒之  
具耳豈有他乎詰其制之非常則曰一武人巧思  
之所創聊效之也時都下鍛工匠人傳聞之其嘗  
爲直之作兵器者皆告於官於是遂下諸理拷掠  
甚急而不服乃收錄妻子拷問極羊毒皆曰實不  
知實不知官請憫之言辭慘然直之曰此事家人

一無所知敢請其所受萃於直之身官聽之乃復  
鞠訊水火備至身無完膚幾絕者數矣居頃之直  
之請曰此事有所由自始蒞事台分歿豈謂有生  
路乎但至明春當自嘗不然身且齏粉不敢白也  
其容貌安諦辭氣慤實不似有慝者官以故許之  
而不問既踰年世間盛傳去年十二月十四日赤  
穗諸士襲吉良氏之第殺義英以復先君之讐也  
獄卒徒隸亦相傳稱直之詳其事乃請自嘗引至  
于庭則曰直之歷世辱赤穗城主之顧義倅臣子

當良雄諸士圖大事屬直之製造兵器向之所爲  
卽其所用也今聞旣復讐直之事畢矣當傳刑之  
秋也嘗恐事之洩又憫刑之及故未始使妻孥有  
知覺也仰願宥彼刑使直之一人就鼎鑊也則雖  
死猶生之年言畢淚如雨流官聞之感其義心減  
死放之家資悉賜其子襲爲鄉長其子稱利右衛  
門直之入京寓郭北瑞光院以院與淺野家有舊  
也改名姓曰松永土齋以壽終

野史氏曰赤穗諸士之結義初得一百人後稍

稍攜貳僅至四十餘士但大石氏之糾合其人  
未嘗輕與之故雖有攜貳者而其情實不外洩  
而直之者一市人也屬之以大事能知其人也  
是有所由也先是直之抵赤穗時暑月公庫風  
于什器頗有珍玩直之謁良雄矚目之良雄請  
而觀之已而失一玉盃檢問之直之之外無入  
者也衆皆意直之以致之良雄良雄大驚召直  
之謂曰今日失一玉盃我知子弗竊然子之外  
無入者衆皆意子將如之何直之恬然曰走實

竊之豈有所逃歟請速就刑時有司潛已告于君君袖間出之曰寡人取而把玩耳直之何知於是羣疑始醒良雄見其甘引罪不愛歿乃以托腹心云然是一旦憤激之事若乃鞭箠之間一言乍泄則不惟大事敗壞也再為君之辱為天下笑直之以歿自矢以成其事功豈在四十餘士之下耶嗚呼治平而聚凶器是反亂之人不可不究治者也而寬妻子之鞠自昔期春皆見聽是平常訟獄所不能得而能然者其誠實

之德感動人心豈不偉乎

賴准以克

獨嘯庵  
永官年也

十數年前余自鄉里暫抵京師由浪粵時長州獨笑菴在焉訪之則坐上有一商客浪粵人也獨笑介余通姓名而曰是子雖商旅哉能脫洒風塵慷慨以之是故義氣相許日以周旋君可善視之顧謂彼曰是余之舊也善文章子平常之志願可託是君遂之因說余曰是子常歎世盛稱赤穗四十餘士之義而無傳天野屋利兵衛者矣自以四十七士義至高矣而

成之者利兵衛也且其忠憤雖四十七士不之過矣  
而况非有君臣之分乎况非有士大夫之望乎身集  
于辜蓼四十七士有所不如也其事業難於四十七  
士所爲十倍焉而無傳之者何也以其足夫乎足夫  
而爲之特可嘉賞焉世有傳萱野三平者萱野氏豈  
足傳乎其可稱者殞躬而已非難事也憤激之餘採  
摭異聞狀其事錄而藏之將俟文人而傳之今君來  
庶爲具別而副是子素願乎予亦幸甚彼人亦踴躍  
喜大攄肝膽乃懷中出艸錄附與余懇求余其時容  
氣未除率爾諾之既別而返于國四方奔走不遑執

毫重東上則獨笑菴已歿其所任併姓名失之而  
艸錄在余所其人自謂託非其人年來之望一旦空  
之獨笑菴誤我其遺憾可勝道乎余不能一日忘於  
懷然栖世路亦末如之何已自卜居於京師身今  
少安因又思之刊于我而行于世則不知其人存亡  
足償萬一乎乃茲舉事蓋其人之志欲垂之千載夫  
有文而無望不足傳之有望而無文不足傳之余無  
文亦無望悔率爾諾之已江村君錫京師之文宗而  
有四方斗山之望且與浪粲諸士相暱庶足傳乎乃  
託之則速諾而不果三年于此促之則曰有日本詩

選之事未暇著手而佗請託之文往往見之乃知疑  
余貧無潤筆余卽黽勉辨之非義氣行之亦不屑爲  
之也以故辭之我同邦之人賴千秋今在浪粵而教  
授而聲價藉甚於洛攝之間余所少相知其人大有  
義氣請之則惠然肯來今其文旣成燦然可觀也於  
是滓澄煙消余心灑然其人存則當吐氣若亡則少  
慰靈寃聊附言以顯其人之志云唯不傳姓名爲恨  
耳

安永乙未杪冬望安執平賀晉民



# 賴千秋

刻旣成及將發行千秋自浪華致書曰頃日醫生松  
田元龍者引一商客來執謁請見見之商曰聞先生  
為執州平賀某著天野屋利兵衛傳有諸曰然平賀  
氏曾於本都以獨笑菴之託約為一商客為此傳自  
獨笑菴死無由與其人相通其文即成不能致之甚  
病焉遂不能措之令余叙之刊而傳之一則欲使其  
人知之一則欲遂其人素志旣命剞劂今當成也商  
曰託於平賀氏僕即是也因曰自託之以來無日不  
思之而千里外人不得問之大失望矣旣而自憫謂  
獨笑兩友則其人必不背於約其文當成縱不傳於





義士餘談

(三十三)

天野屋利兵衛 (上)

大阪町人の鑑と呼ばれて四十七義士と共に名を知られた天野屋利兵衛(假名手本忠臣蔵)は天川屋義平(架空の人物)といふ説が大分行はれて居る、義士通を以て任じて居る人の中にも、これを記録の徴すべきものがないから、竹田出雲が勝手にこんな人物を作つて、一方武士の忠義に對する町人の義憤を見せたので實際に有つた人ぢやないと思ふ人さへ出来た、中には又何處で見たのか「利兵衛は實にしたに相違ないが實は理兵衛であつたのだ」など、云ふものもある、もし利兵衛が架空の人となつて、頼春水の碑文を刻した泉岳寺の立派な石碑も倒さねばならず「義平は男でござんすわいの」と長持の上に胡坐かいてピクともせなだ、勇ましい芝居も眞の芝居にならねばならぬ、然し天野屋利兵衛は確にあつた人で、備前池田家の藏本を遺つて居る、論より證據今日の寫眞板が説明する、これは延寶板の「離波雀」にあつたのをそのまゝ、寫眞にしたのだから相違はない、天野屋利兵衛の名は此の通り立派にあるが、赤穂浪野家の御用商人ではない、そこで必然の結果として湧いて来るのは、天野屋利兵衛と赤穂義士との間に、果して今日まで傳はつて居るやうな關係があるか何うかの問題である、

こゝに記憶せねばならぬものは、利兵衛が備前池田公の御藏本で、大石良雄の生母松樹院は備前池田公の國老池田石見の娘、良雄は幼なく父權内に死別してから、十五歳で大石家を相続するまで、池田石見の手許で人と爲つた事實である、さうしてもう一つ記憶して置かねばならぬのは、利兵衛と義士との關係は、やがて利兵衛と良雄との關係であるべき一事である、藩の御藏本は、一面に金力、一面御用商人であるから、その藩々の國老重役の邸へも出入して親く機嫌を伺つたに相違ない、時には主人の目通りも許され、又それ／＼の用向も云ひ付けられたのは當然である、利兵衛が大阪と岡山との間を往來し、石見の屋敷へ伺候する折々、腕白盛りの多久馬(良雄の幼名)とも顔見知りであつたのは知れて居

る、子供の時から平民主義で、能く上下貴賤の別を度外に置いて居た多久馬は、利兵衛の活達で、欲氣で、小さい約束も堅く守り、大きい利益に目をくれず、一圖に義を守る氣象のあるらしいを愛して、利兵衛々々心易く交つたのは、實際に無い事とも云へぬ、石見も又利兵衛を信用する餘り、彼が屋敷へ来るたび、多久馬をも同席させて、利兵衛の男らしい氣質を吹聴したか知れぬ、後々あれだけの大事を成し遂げる男であるから、町人ながら何處かに骨のあつたのが、良雄の氣に入ると同じく、利兵衛も又良雄の將來に望みを屬して、良雄が大石家を相続して後、岡山へ往來する序、さのみ廻り道でもない播州赤穂へ立ち寄つて、良雄の起居を尋ねたのは事實だらう、良雄も又江戸や京都へ行くことに、大阪を過つて利兵衛と心易くしたのも事實だらう、さうして大阪の富豪と五萬三千石の城代家老とは武士町人の階級から放れて親しく交りをする結んだものと思はれる





世苟留之天地間亦足耳矣我得觀之與否實在天也今其文成先生之手且刊而布於天下僕不知手之舞足之蹈素願之遂在乎賀君之信與先生義氣贊成之功其恩惠不知所謝也是日賓客雜沓應接不能詳草也而別余得之亦大喜蓋余雖為此舉不知其人存否尚不憚於心今其人存而與千秋相見得彼此伸情千秋之見猶余見之而其姓名亦得傳也而後為無遺恨因重記之其人稱塩屋伊兵衛在浪華緑橋畔以賣糕餅為業

丙申正月

晉民又識



浪西一傑然屋川西橋寺直之  
不像女墓在在否或之後人別  
留道者過其真云  
鐵齋記

●天野屋の記念會  
備なる天野屋利兵衛の墳墓ある洛北椿  
寺にて一昨十四日午後同寺の檀徒福井  
豊次郎氏等の發起にて好事家數名相會  
して天祐會なるものを組織すること入  
し左の會規を協定したる由  
一 天野屋利兵衛を記念せんが爲に此の會を起す  
二 會の名を天祐會と稱す  
三 毎生一回例會を開く月は椿の咲く四月、日は  
故人の忌日なる六日必ず午後早々より明雨を降  
ぜず  
四 會費は五十錢、何人の來り會するも短けず  
五 當日は酒肴を來會者に呈す  
六 別に諸大家の題詞をも願つ  
七 交誼は世話方に於て相互取定め毎開會前世上  
に公表すべし  
當日席上書畫の揮毫及唱歌の應酬あり  
左に六絶及聯句各一篇を收む  
忠義事蹟千春。世上榮枯轉輪。士也  
二三其德。不如一個商人。伊也  
嗚呼吾是丈夫兒。罵罵爲事何爲爲不爲

帶市長持之上座座危。長命山德壽氣發高  
大漢捕時。小地柱山復德川意無人知。福  
非真尊四十七士英名華。雖非當日四  
人抽券碑。宇野五山野寺醉中作此詩。以  
村敬堂

Various small notices and advertisements at the top of the page, including dates and names.

